

【資料】

東京分室3年間(2019-2021)の活動を振り返って： 可能性と問題点

井黒忍・青柳英司・大澤絢子・鍾宜錚
西村晶絵・荻翔一・陳宣聿

真宗総合研究所東京分室では、2019年度より2021年度にかけて指定研究「宗教と社会の関係をめぐる総合的研究」(研究課題「社会的価値観における宗教の役割の解明」)を実施した。本研究は他の研究班とは異なる形での組織編成および実施・運営を余儀なくされるものであったため、通常のようにその成果を論文としてまとめるには大きな問題があることが当初より予想された。そこで、研究活動の総括として2022年3月2日に開催した座談会「東京分室3年間(2019-2021)の活動を振り返って：可能性と問題点」の内容を記録にまとめ、東京分室の研究活動を振り返るとともに、その可能性と問題点を整理し、今後の活動に益する知見を提示することとする。

座談会の参加者は井黒忍、青柳英司、鍾宜錚、荻翔一、陳宣聿(以上は開催時の研究員)と大澤絢子、西村晶絵(以上は元研究員)であった。なお、座談会は新型コロナウイルス感染症の流行状況に鑑み、オンラインと現地参加を組み合わせたハイブリッド形式にて開催された。以下、座談会の発言を記すが、行論上、不要と思われる内容および質疑応答の一部は割愛した。

井黒) それでは、これから「東京分室3年間(2019-2021)の活動を振り返って：可能性と問題点」というテーマで座談会を開始していきたいと思います。皆さん、遠くから、またお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。今回の座談会というのは初めての試みであり、2019年から2021年までの3年間の研究活動を振り返ることが目的です。さらにそこから新たな可能性を模索しつつ、問題点あるいは改善すべき点がどこにあるのかを、それぞれのご意見を聞きながら見つけていきたいと考えております。

私たちは、東京分室が設置されてから3年後に、いわば第2期として研究を始めました。そこで大きな問題だったのが、第1期の3年間との接続があまりうまくいかなかったことにあるかと思います。もともと若干の研究員が3年目にあたる2019年度にも残る可能性があったのですが、実際には諸事情によりそれがかなわず、私を含めて完全に新しいメンバーで一から始めていくことになりました。もちろんそれはそれで有意義ではありましたが、それまでどういうことを、どうやってやってきたのかというノウハウを知らないままに、一から模索をしていくことが多かったと思います。そこで、今回はその反省を踏まえて、それぞれのお話をお聞きしながら3年間を振り返りつつ、次につなげていけるような内容を残していきたいと思っています。ぜひ、率直な意見をお聞かせいただいて、改善すべきところについては積極的に改善をし、可能性がある点についてはどんどんそれを伸ばしていくために、この座談会の成果を利用していきたいと思います。皆さんの活発な発言を期待しております。

それでは第1部に入っていきたいと思います。第1部に関しましては、個人研究としてどのような研究をされてきたのか、さらには共同研究をどのように進められてきたのかという点について、それぞれのお話をいただきたいと思います。なお、共同研究については、「宗教と社会の関係を巡る総合的研究（社会的価値観における宗教の役割の解明）」をテーマとして掲げました。これは分室の設置の目的とも関わりますが、どう生きるのか、あるいはどう死ぬのかといった人類が抱える普遍的な問題に加えて、現代のさまざまな問題に研究者である各人がいかに向き合うのかという問題意識に基づき、苦勞してテーマを設定していったと記憶しております。もう1つ、あまり表には出て来にくかったかもしれませんが、テキストをしっかりと読んでいこうという点も大事な部分でありました。テキストに基づくさまざまな知見から現代の問題にかかわるような設定をしていく、さらに現代の問題に向き合いながら、その肉づけとなるような研究を各自で深めていく。それぞれの個人研究を基礎としながら、他の研究者との交流を通して新しい問題に挑んでいくことが共同研究に求められた点だったと思います。こうした意味で個人研究と共同研究は互いに関連しながら進められたと思いますので、それぞれの個人研究と合わせて、共同研究にどのような形で関わってきたのかという点をお話をいただければと思います。それではまず青柳さんをお願いしたいと思います。

青柳) 東京分室 PD 研究員の青柳です。専門は真宗学で、親鸞(1173-1262)の思想研究をしています。まず、私の個人研究は大きく2点ありまして、1つ目は親鸞の仮名遣いの研究になります。親鸞の主著とされる『教行信証』には、坂東本と呼ばれる自筆本が現存しております。『教行信証』は漢文の著作ですが、それを日本語に変換するために、親鸞自身が訓点(読み仮名や送り仮名、返り点など)を振っております。しかし、従来の坂東本の書誌的な研究は、漢字部分に関する研究がメインであり、訓点に関する研究は、ほとんどなされていないというのが現状でした。この訓点につきまして、共同で索引を作り、坂東本における親鸞の仮名遣いの特徴を調査して参りました。この研究の意義ですが、親鸞の仮名遣いは、いわゆる歴史的仮名遣いと同じではありません。当時の発音に合った、独自の仮名遣いを実践していたことが知られています。つまり親鸞は自身の思想を発信する際に、当時の社会や対象となる人々を意識して、よりわかりやすい仮名の表記を模索していたと言えるのです。このような、当時の社会を意識した親鸞の実践を解明することが、私の個人研究の1点目になります。

続いて2点目ですが、これは『教行信証』の解釈史の研究になります。『教行信証』の注釈書は、これまで膨大な数が作られてきました。親鸞思想の専門家でも、全て把握できないような数です。ただ、近世以前の研究は基本的に、坂東本を参照しておりません。また、『教行信証』も、浄土真宗をおこした根本聖典として解釈されておりました。それが近代に入りますと、坂東本が参照可能となり、その書誌的な研究が進みました。さらに、親鸞が生きた時代の仏教界の思想状況なども、近年は研究が進んできています。このような近現代の研究成果を踏まえて、従来の『教行信証』解釈を批判的に検証することが、私の個人研究の2つ目になります。

次に科研費を用いた研究ですが、これは「近世における『教行信証』の創造的解釈-智暹『樹心録』の研究-」というテーマになります。智暹(1702-1768)という人は、近世中期頃の浄土真宗本願寺派の学僧です。この智暹は『教行信証』の注釈書を書いておりまして、これが『教行信証文類樹心録』(以下『樹心録』)です。この著作は江戸時代に広く流布しておりまして、大谷派の学僧らも頻繁に参照しております。では、この『樹心録』はどのような注釈書であり、どうして広く参照されることになったのか。その影響とは、いかなるものであったのか。このような問題を、江戸時代の思想状況や、宗派が抱えていた課題などを

踏まえて、考察を進めております。これによって『樹心録』を、近世仏教として位置付けていくことが、本研究の目指すところとなります。

続いて、分室3年間の研究成果ですが、まず学会や研究会などでの発表ですが、2019年度は9回、2020年度は4回、2021年度は9回です。また、この3年間で論文は5本、研究ノートは2本書かせていただきました。2020年だけ成果が少ないのですが、これは完全に新型コロナウイルスの影響でして、私が参加している学会や研究会などが、軒並み中止となってしまいました。その関係で、2020年度だけ数が少ないという状況です。

次に共同研究の方ですが、私が中心となって取り組ませていただきましたのは、鹿児島島の調査とシンポジウムが1つです。まず、鹿児島島の調査の方からお話させていただきます。共同研究のテーマは「宗教と社会」ですが、宗教と社会の関係は、いつの場合も友好的であるとは限りません。宗教の側が反社会的な運動に走ることもあれば、公的機関が宗教を弾圧するということもありました。後者として著名なのは、近世におけるキリシタンの禁圧ですが、同時期に鹿児島(薩摩藩)などでは、浄土真宗も禁圧されておりました。このような状況下の真宗信仰は、「隠れ念仏」と呼ばれています。この「隠れ念仏」を取り上げて、宗教と社会の非友好的な関係を探ろうというのが、調査の目的でした。具体的には、(1)当時の「隠れ念仏」の状況と、(2)それが現在の鹿児島においてどのように受け止められようとしているのかという2点を、主な調査対象としました。鹿児島で「隠れ念仏」の調査・研究をされている方から、史跡などを案内いただき、今後の取り組みについてもお話をうかがいました。

続いてシンポジウムですが、私が取り上げたテーマは「仏教と障害」でした。日本の社会福祉は古くから、仏教と結びついてる面が非常に多くありました。ですが、現代的な視点から考えた場合、日本の仏教は必ずしも、障害者差別を乗り越えるという方向に向かっていない場合もありました。それどころか、業思想などを用いて、差別を正当化するということがあったわけです。さらに、シンポジウムを開催した2021年は、東京パラリンピックの開催年でもあり、2016年に相模原市で起きた障害者施設殺傷事件から、ちょうど5年の節目の年でもありました。それを1つの縁とし、改めて仏教(特に浄土教)の視点から障害者差別を問い直すとともに、誰もが平等に生きられる共生社会の在り方について、議論をさせていただきました。

井黒) それでは続いて、鍾さんお願いします。

鍾) 私の個人研究は、孝の概念と文化が終末期医療の現場にどのような影響を与えたのか、とりわけ終末期医療における意思決定への影響および家族の役割とその可能性を研究するものです。患者本人の自己決定権との関係性はもちろん、個別の社会におけるよい死の概念の変化も孝の文化に関わっています。研究対象としては、儒教文化が浸透している日本、韓国、台湾を中心に研究をしています。共同研究に関しては、主に日本と台湾における臨床宗教師の活動と終末期における宗教の役割を検討してきました。東京分室に在席したこの3年間では、研究会またはシンポジウムで終末期医療に関わる僧侶や臨床宗教師の方々の経験や臨床現場での実践をうかがうことができ、とても貴重な経験になりました。私の専門は生命倫理なので、最期のあり方や死の方について、倫理学の観点から考察することが多かったのですが、東京分室に在籍したことで、宗教と倫理との関係性から終末期の医療倫理を分析するようになり、私自身の研究に大きな刺激となりました。

研究成果に関しては、科研費の共同研究班の定例研究会で定期的に研究発表を行い、口頭発表については国際学会と国内学会で1回ずつ、発表内容をまとめた論文を各年度に投稿するという形で発信を行なってきております。これらに加えて、招待講演や書籍の共著での成果発信も行いました。2020年と2021年は新型コロナウイルス感染症パンデミックの関係で海外への渡航ができませんでしたが、2019年度には青柳さんと西村さんと一緒に台湾で現地調査を行いました。台湾では複数の宗教施設を訪れて、宗教団体の社会進出や慈善事業の実態についてインタビュー調査を行いました。台北市にある善導寺、高雄の佛光山、嘉義にある故宮博物館南院、そして台北市にある同光教会を訪れて、それぞれの教団で行われた慈善事業の内容やLGBTQに対する取り組みについて聞き取りを行いました。私は台湾の出身ですが、初めて訪れた場所が多く、実りの多い海外調査だと感じました。同じような調査を2020年度も行いたかったのですが、パンデミックの関係で出張が減り、分室メンバーみんなで海外に行く機会がなくなったのは残念でした。

大谷大学に在籍したこの3年間を振り返ると、たくさんのことを学んだことに感謝を申し上げなければなりません。特に東京分室でのイベントを通して、日本人の宗教観への理解を深められたのはとても良かったと思います。私は来日して

今年で13年目となり、日本の生活に慣れていることもあって、日本人の宗教観は理解しているつもりでした、しかし、実際にはあまり理解していない事も多く、PD研究員の着任をきっかけに、日本仏教の歴史や各宗派の差異を勉強することで、日本人の宗教観を再認識することができました。日本人の宗教観は実に多様で、特に仏教に関しては文化として染みついている部分が多く、宗教は空気のような存在として感じる人が多いのではないかと思います。無宗教と称する人たちも、祭りや初詣など宗教的な行事に参加しています。これはキリスト教圏、または台湾のような民間信仰が盛んでいる国にいる人たちの宗教観とは異なると感じます。PD研究員になって得られた最も大きな収穫の1つは、こういった日本人の宗教観を認識できたことです。

仏教だけではなく、宗教全般に関連する知識や学問に間近に触れることができるソフト面での良さに加え、ハード面でも東京分室という場所は情報発信をする上でとてもありがたい存在でした。PD研究員は東京分室を拠点にさまざまな成果発信、打ち合わせ、インタビュー調査を行うことができます。私自身も、東京分室で読売新聞と神戸新聞の取材を受けました。また、私が所属している日本生命倫理学会の取材も東京分室で行いました。そのほか、科研費の研究会やオンライン会議に必要なIT機器の貸出なども可能だったので、とても快適な環境で研究活動を推進できたことにも御礼を申し上げなければいけません。

井黒) 続いて西村さん、お願いします。

西村) 私は2019年度に分室に在籍し、2020年度からは盛岡大学に移っております。個人研究に関しては、私はフランス文学を専門にしており、第1次世界大戦前後のフランス政治思想とキリスト教に関して、特に極右の政治思想がカトリック教会と結びついて政治的なプレゼンスを高めていく際のロジックや、カトリック側の思惑などに関心を持っています。さらに、アンドレ・ジッドというプロテスタントの作家がありますが、プロテスタントの作家がなぜかカトリックと結びついた極右政治家たちと同調するような動きを見せていたことも面白い点です。プロテスタントの作家とカトリック支持の極右の政治思想家たちが政治の場面で足並みを揃えるとき、キリスト教思想はどのように矛盾したのか、あるいはしなかったのかという点を明らかにしたいと思い、研究をしてまいりました。

個人研究に関する成果としては、2019年度に南山大学でのシンポジウムとフランス文学会で口頭発表を行いました。文学会で発表させていただいた内容をま

とめて、昨年度の『真宗総合研究所研究紀要』（38号、2021年）に論文「アンドレ・ジッドとシャルル・モーラスー接近と離反の具体的様相ー」を投稿しました。共同研究に関しては、鍾さんや青柳さんと2019年に台湾での調査を行い、さらに同年末から2020年1月にかけてフランスでの資料調査を行いました。これは極右政治的団体とみなされるアクション・フランセーズについて、あまり日本には資料がなかったのですが、フランス語で最近新たな著作が出版されてきているため、それらの資料を収集する必要が生じたからです。

あわせて、キリスト教とイスラム教の社会的影響力とその意義について調査を行いました。フランスでは、1905年以降は政教分離、「ライシテ」という概念が非常に明確に打ち出されていて、社会の公的な場や公的な政治からは宗教色を完全に排除していくという方向で社会が成り立っています。しかし、宗教が全くフランスの中で存在感を持っていないかということ、もちろんそうではなく、キリスト教はもとより、今はイスラム教がフランスの中で第2位の宗教になっているので、これらの宗教がフランス社会の中で、どのような影響力を持っているのか、あるいは持っていないのかという問題について調査を行いました。また、滞在中の1月1日にはパリの教会のミサに参加し、老若男女、人種や出身（ルーツ）を異にする各地の人たちが集まっている様子を実見することができました。

続いて分室での活動を終えてというところで簡単にまとめてみますと、私が大きなメリットだと感じるのは、いろいろな研究者の人と接点を持てたところかと思えます。先ほども述べたように、私自身はフランス文学を研究しておりますので、これまでフランス文学研究者とかフランス語に関する研究をしている研究者など、フランス関連でしかつながらず可能性がありませんでした。しかし、分室では社会と宗教という大きなくくりが研究員募集のキーワードとなっており、様々な宗教に関して、多様な角度から研究している人たちが集まっていたので、こういう研究の仕方もあるのか、こういう研究があり得るんだなということを知ることができて、非常に大きな経験となりました。あとは研究に専念できる時間がきちんと得られたということも大きかったです。分室の研究員になる前は、たくさんの方の非常勤の仕事をかけ持ちするなどして、あまり研究に集中する時間を確保できませんでした。生きるためには、かけ持ちせざるを得なかったのですが、分室の研究員に採用され、時間をもらえてしかも金銭的にも十分援助してもらえるというところは、本当に大きかったと思います。

環境も結構大きかったと思います。自分のパソコンや本棚が備わっていて、プリンターも自由に使えるところで研究活動を行うことができるという経験はそれまでありませんでした。学振(DC2)をもらっていた時も、所属はあくまで自身の出身大学院なので、もともと環境が整っていなければ、身分が変わっても研究環境が改善されるわけではありません。いつでも研究できる場所が用意されてるということは大変に重要で、自分にとって初めてちゃんと研究する環境がもたらえたと思っています。

あとは、東京分室のさらなる発展のためには、幅広い分野の研究者が集まってくるのが理想かと思います。場合によっては少し JREC-IN での募集の仕方を見直したりすると、今まであまり応募してこなかったような人たちの目にも留まりやすくなるのではないかと思います。また、分室をアピールすることも重要だと思うので、継続的にシンポジウムなどを開催するというのは、今後もやっていくべきだと思います。これらは分室の側の努力ですが、大学側も分室の存在をもっとアピールすべきではないかと思います。若手の研究者に対してこれだけの待遇を与えてくれるだけでなく、何かの分野に特化することなく大きな枠で募集を行っている大学は多くはないと思いますので、もう少しその点をアピールしても良いのではないかとと思います。

井黒) それでは続いて大澤さんお願いします。

大澤) 東京分室の2年間、2019年度から2020年度の在籍中に私が何をし、何ができたかなどについて、簡単にお話しさせていただきます。私がこの東京分室に志望した動機を改めて思い返してみたのですが、東京が拠点であるという点が、まずは大きかったです。というのも、それまで龍谷大学に関わり、東京では、大谷派の学事施設である親鸞仏教センターにも少し関わっていたのですが、宗教が身近でない土地で研究することの大切さを京都で研究活動を行っていた際に改めて感じていました。伝統宗教と社会との接続可能性や、現代社会において宗教とは何かというのを考えるには、私としては東京が適切であると考えたため、志望しました。さらに、さまざまな分野の研究者が集まるという点も魅力的でした。例えば、真宗学という1つの分野からだけではなく、分野横断的に、「宗教と社会」という大きな視点から、宗教を多角的な視点から考察できる、社会発信もしていけるという点にも惹かれました。何より、共同研究があるという点が私としては、志望したいと思った一番の理由でした。自分の研究分野の専門性を高める

だけではなく、他分野だったり、他大学の研究者だったり、そうした方々と関わりながら研究をしていきたいという思いが強くあったので、応募をしました。

在籍中にできたことは、大きく言えば、東京分室が研究テーマとして掲げている「宗教と社会」に関する研究です。まず、分室の共同研究として、私は「女性と仏教」という問題を扱いたいという思いがあり、このテーマに関した活動に取り組みました。共同研究に関するものとして、個人的として「女性と仏教」に関する研究発表や、論文の執筆に取り組みました。また、分室の研究員の皆さんと共に、勉強会や公開シンポジウムの開催も実現させました。研究会では、君島彩子さん（現日本学術振興会特別研究員）や、井川裕覚さん（現上智大学実践宗教学研究科特別研究員）のお2人をお呼びして、近代日本の観音像についてや臨床宗教師の現状など、私たちの個人研究からはなかなか出てこないような新しい視点だったり、あるいは関係するかもしれないけども、もう少し専門家から聞いてみたいといったテーマに関する研究会を開催しました。君島さんにお話しいただいた近代の観音像という視点を通して、宗教と日本社会の関係性だったり、公共空間における宗教の扱われ方などを改めて考えることができました。実際に臨床宗教師をされている井川さんのお話から、宗教者であることが医療現場でどう活かされ、あるいはそこにどのような困難さがあるのかという点を踏まえつつ、高齢化社会、あるいは多死社会における宗教者のあり方を、現場と学術的な視点の両面から考えることができたと思います。臨床宗教師というテーマは鍾さんのご研究ともつながるものです。このように他の研究員の皆さんのご研究と絡ませながら、多角的な視点で研究会を開催したり、シンポジウムを開催したりといったことができました。私の退職後、分室では臨床宗教師をテーマとした公開シンポジウムも開催されており、分室としての次の研究や交流の機会へつなげることもできたと考えます。

企画した2つの公開シンポジウムのうち、1つ目は、「日本仏教を生きる女性たち」というテーマで、当初は2020年3月に開催予定でした。こちらは、西村さんに会場のセッティングや、会場とのやり取りに注力していただきました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大による影響で、開催直前に中止になってしまいました。本シンポジウムは、翌年10月にオンラインにて開催することができました。開催にあたり、分室内で学習会も行いました。私は日本仏教を中心に宗教の研究をしているのですが、なかなか教義の研究というところまでは踏み込

めていないので、こういったことは、青柳さんがご専門でいらっしゃる真宗学との接続だったり、あるいは、青柳さんは宗教者でもいらっしゃるなので、そういった視点から「女性と仏教」といったことについて共に学び、考えたりすることができたと思います。シンポジウムでは、「女性と仏教」や、教団にとって女性たちとはどういった存在なのかという視点から、伝統教団の良い面と悪い面の両方を考える機会になったかなと思います。公開シンポジウムの2つ目は、「近代日本の監獄教誨と宗教」をテーマとし、2021年3月にオンラインにて開催しました。このシンポジウムでは、近代日本の法制度に宗教が関わってきた経緯を学ぶこともできましたし、ほとんど知る機会のない監獄における実際の取り組みについて、専門的に研究されている方からお話しをしていただきました。こちらのシンポジウムにも多くの方に参加いただき、充実した議論の場となったかと思えます。その他、日程の調整や、案内の発送作業、さらには、分室として初めての試みとなったオンライン開催のための準備など、さまざまなことを研究員の皆さんと協力してできたかなと思います。

次に個人研究についてですが、できたことは大きく2つです。1つ目が近現代メディアと宗教に関する研究発信、2つ目が近代における宗祖像の形成に関する研究発信です。1つ目に関しては、新聞に代表される印刷メディアや鉄道やラジオといった、近代の新しいものごとと宗教との関わりについて研究しました。2つ目に関しては、僧侶ではなく、また信仰者でもない人たちが、小説や戯曲などの文芸作品を通して親鸞に代表される宗祖をどのように語ってきたか、について考察しました。

研究成果として、2019年に単著を出版し(『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』筑摩書房)、中世近世、そして近代における親鸞イメージの展開についてまとめました。また、4冊の共著に執筆者として加わることができました(『日本仏教と西洋世界』法藏館、『メディアのなかの仏教』勉誠社、『知っておきたい日本の宗教』ミネルヴァ書房、『近代の仏教思想と日本主義』法藏館)。それぞれ仏教だったり宗教だったり、物語と宗教、あるいは日本仏教と戦争の問題だったり、さまざまな角度から日本の宗教というものを考察しました。

以上のように、在籍中にできたことをまとめますと、他の研究の皆さんの活動や研究と連携しつつ、研究会やシンポジウムを開催することができました。また、企画や開催にあたって必要となる事務的なスキルも身につけることができた

と考えます。個人研究としては、「宗教と社会」というテーマに関した多くの研究発信をすることができましたが、これは、分室が研究に集中できる環境の用意された、非常に恵まれた場所であったからこそ達成できたものです。また、自分としては、専門性を高めつつ、多領域に目配りした研究を行うとともに、分室での研究活動を通して、社会に発信する力を鍛えることができたと思います。

やりたかったことをいくつかお話しますと、もう少し大谷大学と連携ができたらよかったかな、と思います。東京と京都が距離的に離れており、大学の先生方と共同研究などのかたちで交流することがあまりできませんでした。しかし、コロナ禍以降、オンライン環境が整いつつあるので、分室の研究員全員がかかわるかたちで、オンラインでオムニバスの連続講座だったり、授業を持ったりすることも、もしかしたら可能かなと思います。東京分室は、博士号を取ったPDが研究活動をし、修行する場所ですが、博士号を取った後に必要となるのは所属に加えて教歴かと思います。そこで、例えば「宗教と社会」とのテーマを掲げて、それぞれの研究員が授業を担当するなどして、教育者としての訓練の機会を与えていただけたら、ありがたいなと思います。また、研究員がかかわるかたちでオムニバスの市民講座を開いてもいいかなと思います。少しずつ、分室の認知度を上げていけるよう、継続的にシンポジウムや研究会等のイベントの企画をし、外部へ発信していくことや、ホームページでの活動報告や紹介なども引き続き重要でしょう。

井黒) 続いて、萩さん、よろしくお願ひします。

萩) 私は2020年10月に着任しました。1年半ほどの間にまだ成果らしい成果が出せていませんが、研究の概要と現在の進捗状況を中心にお話できればと思います。私は在日外国人の生活やエスニシティに対して宗教がどのようにかかわっているのか、宗教が果たす固有の役割とは何なのかなどに注目して個人研究を行っています。特に在日コリアンと呼ばれる人たちのキリスト教信仰を対象に研究をしております。

在日コリアン、朝鮮半島から日本に渡ってきた人と、その子孫で構成される人たちが、戦前から戦後にかけて日本各地に同胞のためのプロテスタント教会を建て、そこがいわゆる民族の教会というような性格を有してきました。つまり、教会は自分たちの言葉や文化を維持、継承するための場として機能するなど、単に宗教的な充足だけではなく、社会的な機能を有する場としても活用されてきまし

た。1980年代以降になると、いわゆる韓国から新たに来日したニューカマー(新移民)も、プロテスタント教会にやってきました。その結果、在日コリアンのための教会としての機能はあまり変わっていないのですが、昔からいる、いわゆるオールドカマー(旧移民)とニューカマーが混在するような状況が最近になって見られるようになった訳です。私としては、ほぼ2世以降の世代であり、日本で生まれ育ったオールドカマーの人たちが、ニューカマーの影響をどのように受けてきたのかという点に関心を持っています。広く言えば、グローバル化する社会の中で、旧移民が新移民の影響をどのように受けて、それにより自分の信仰生活が変わったのか、それとも維持され、あるいはより強化されてきたのかといったところに注目して調査をしてきました。もっともコロナ禍で思うようにいかず、10人弱の方々これまでインタビュー調査を行ってきました。

まだ分析の途中ではありますが、現時点である程度、見えてくる部分はあります。ニューカマーの方からは、初めて自分が在日コリアンであることを自覚したというか、やっぱり自分は韓国人じゃないんだということを改めて思い知らされたという語りもありました。それとキリスト教の信仰がどう結びつくのかを明らかにすることが、今後の課題です。また、韓国ではキリスト教が盛んで、4人に1人、もしくは3人に1人がクリスチャンとされています。その中で政治的、ペンテコステ的な熱い祈り、聖典の働きを重視するようなやり方が韓国ではあたりします。そういう熱い祈りとか、異言のようなものを見聞きして、それに対して感化され受容するような在日コリアンの方々もいて、一枚岩じゃないことが分かります。今後もこうした調査を続けていくことに可能性もあるのですが、他方で不安定というか、コロナ禍なので、どこまで調査が進められるか分からないところもあり、最近は文献調査のほうにシフトをしています。ただし、文献調査でも、ニューカマーに対してオールドカマーがどう思うかと言うようなことは、文字化されないもので、なかなか見えにくいのですが。

特に、今、文献調査を通して注目しているのが1950年代から1970年代頃の青年会活動であり、当時の青年会の資料を読み解いています。当時は今よりも在日コリアンに対する差別的な待遇というのが日常的に行われており、就職するにあたって自分の国籍を隠したり、あえて偽るなどして就職活動を行ったりしたとされます。また、結婚に際しても差別が存在しました。こうした事が2世の青年たちにとっては、悩みであったわけで、青年会が出している雑誌にその悩みが投

稿され、ディスカッションがされています。こうした在日コリアンの、当時の特に2世たちの生活課題や就職差別、結婚差別などに対してキリスト教の信仰や、あるいは教会という場、青年会という組織が何らかの生きていくうえでの指針になったのか、あるいはならなかったのか、そういったところが見えてくれば面白いかなと思いつつ、分析をしているところです。また別の観点から言えば、当時のマクロな社会情勢も無視できません。韓国の軍事独裁政権や日韓国交正常化などの問題に対しても、雑誌上で議論がなされています。こうした社会情勢に対して、在日クリスチャンとしてどのように向き合ってきたのか、こういった観点からも分析できればと考えております。

共同研究については、2021年7月に行われたエホバの証人の組織的な展開に関する研究会を企画し、当日の司会を担当させていただきました。お招きしたのは、佛敎大学の山口瑞穂さんです。私もキリスト敎の研究をしてるのですが、研究会を通してこうも組織構造が違うものかと、改めて驚かされた次第です。鹿児島出張や他のシンポジウムの時もそうでしたが、教誨師や臨床宗敎師の話など、勉強不足でこれまで全然考えてもこなかったようなテーマばかり扱っていただいて、非常に知見が広がったというのが正直な感想です。これまで共同研究で扱ってきたテーマは、私が現在担当している非常勤の授業でも一部、取り入れております。鹿児島調査に関しては、普段公開されてない念仏洞にも入り、内部を見せていただいたのは本当に貴重な経験だったと思います。同時に、共同でフィールドワークを行う機会をいただけたことも大きな学びだったと考えます。私の場合、普段の調査は1人でやるのが主なので、他の方の調査スタイルを学ぶ機会がこれまであまりありませんでした。しかし分室では、共同で調査に行って、ほかの人の調査のスタイルを見ることができると。例えば同じ道を通っていても目のつけどころが全然人によって違ったり、同じ話を聞いていても興味関心の持っていく方が違ったりする。こうしたことを間近に感じることができたのは非常にいい経験だったと思います。惜しむらくは、今年度、1月末に生駒の調査を予定し、色々計画をしていたんですが、コロナの感染が急拡大したため、中止せざるを得なかった点です。共同調査について、今後どうしたらいいかという話については、第2部でちょっとお話しできればなと思っております。研究成果については、学会・研究会での発表を1年半の間に3回、論文については1本です。来年度は最低でも論文を2本は提出したいと考えております。

井黒)では、最後に陳さん、お願いします。

陳)私は鍾研究員と同じ台湾出身です。まず簡単な自己紹介を申し上げ、そのあと自身と東京分室とのかかわりについて話していきたいと思います。私の個人研究のテーマは現代社会における宗教と胎児の生命観の研究で、主に水子供養の比較研究とプロライフの2つのアプローチから研究を進めています。私は2020年3月に東北大学の博士課程を修了し、2021年4月に東京分室のPD研究員として着任しました。日本に来てからずっと仙台におりましたので、東京という場所が政治と文化の中心であることを非常に強く感じています。自分にとって、東京分室PD研究員の期間は、博士論文提出後における成果の公開とこれからの方向性を模索していく時期であると位置づけております。

続いて、個人研究の2つのアプローチである水子供養とプロライフ運動について説明します。まず、水子供養の日本と台湾の比較研究に関しては、主に宗教施設でのフィールドワークと文献調査を通して研究活動を行っております。水子供養は日本で1970年代以降に流行り始めた宗教現象です。先行研究では日本の特殊な宗教現象として論じられることが多かったのですが、同様の事例は日本に限らず台湾や韓国、さらに仏教のルートを通してアメリカでも広く見られることが分かりました。そこで比較研究への取り組みを始め、特に台湾の事例として嬰霊(赤ん坊(嬰兒)の「嬰」と靈魂の「霊」との関係性を意識して研究を進めてきました。そしてこのような儀礼が「胎児」という新しい死者を対象にするものであり、東アジアにおける死者救済の儀礼とも深く関わっていることに気づきました。

その後、水子供養に関する調査を進める中で、積極的に胎児の生命尊重を唱える団体の影響力にも気づかされ、日本と台湾におけるプロライフ運動を推進する団体についても調査を始めました。主にその組織構造や成立の経緯と内容、影響力について分析を行っています。なお、2021年度の成果としては『怪異学講義』という書籍にコラムを書かせて頂いたほか、日本台湾学会での発表の予稿論文に基づき査読付き論文を投稿しました。また、プロライフ運動に関して、日本宗教学会と印度学宗教学会で発表を行いました。

私は2021年に着任してから、公開研究会とシンポジウムに携わりました。これらのイベントは分室のメンバーみんなが作業を分担し、企画・提案や討論などを行ってきました。シンポジウムと研究会のほか、現地調査も企画しましたが、

コロナ禍の影響で調査の場所や計画が2度も変わってしまいました。特に生駒の調査に関しては、具体的な日程や調査の内容、宿泊地の選定など、計画がかなり進んでいましたが、オミクロンの感染者数の増加により中止をやむなくされました。もう1つ、私自身が強く関与したのが先月開催されたシンポジウムです。鍾さんと一緒に企画させていただきました。鍾さんがご専門の終末期医療に焦点を絞り、台湾、韓国、日本の現状について話し合い、コロナ禍の中、医療、宗教がどの様な関わり方をしているのかを討論しました。今までのシンポジウムでは、主に1人の研究員が企画を担当していましたが、今回は2人が担当し、しかも鍾さんをご自身も登壇者として発表し、私が司会を担当しましたので、今までとの違いも出せたのではないかと考えています。

東京分室に来て感じた良い点と私が考える改善点について触れておきたいと思います。良い点としましては、異なるメンバーとの交流や共同研究を挙げることができます。特に自分と異なる観点を持つ研究者とのふれ合いは、刺激になるところが多いと思います。さらに事務局のサポートです。着任後すぐに在宅勤務となり、色々と分からないことが多くありましたが、細かい所まで質問に答えて頂きました。また、科研費の申請の際にも色々とアドバイスを頂きました。一方、分室の改善点としては、情報の整理と発信にすることが挙げられます。外部への発信手段として、ホームページなどのコンテンツをさらに充実させるのがいいのではないかと考えました。また、東京分室の内部の資料の整理に関しても少し感じる場所があります。これまでは研究成果については成果報告書を作成してきましたが、シンポジウムや研究会などの準備過程に関するプロセスや具体的な手順については整理されていないことが多いと思います。その都度、反省点やプロセスを整理して問題点や課題を明確化することで、今後の企画立案も進めやすくなるのではないかと考えます。もう1つは、異なる形式での研究活動の展開という点です。2月のシンポジウムの際に寄せられたアンケートによれば、シンポジウムのほかにも別の形式での研究活動の展開を希望しておられる参加者もいらっしゃいました。例えば、基礎的な講義など、今まで開催されてきたシンポジウムや研究会とは違うかたちでの展開の可能性も考えられます。今回のような座談会もそのような新しい試みに当たると考えますし、新たな展開につながるのではないかと考えます。

井黒) 皆さん、ありがとうございます。第1部はこれで終了したいと思いま

す。皆さんのお話の中にもいくつか大事なキーワードが出てきたと思いますし、私の方で用意した項目もありますので、それらの点について第2部で話し合っていきたいと思います。(休憩)

井黒)では、第2部を始めていきたいと思います。いくつかトピックを選んで適宜質問をしながら進めていきたいと思いますが、もちろんご自由に話していただいて結構ですので、特に指名はなくてもご意見があればいつでもお話しください。まず個人研究に関しては、それぞれが専門性を高めていくことが重要であることは言うまでもないでしょう。また、もちろん数だけが問題ではありませんが、個人的には成果としてある程度の本数の論文を書き、発表を行うことが必要かと考えております。共同研究に関しては、「宗教と社会の関係をめぐる総合的研究(社会的価値観における宗教の役割の解明)」というテーマについて話していきたいと思います。このテーマに行き着くまでがなかなか大変だったと記憶しております。2019年4月にスタートしてから、半年くらいはテーマ設定に時間がかかったと思います。この点について、特に初期のメンバーにそのときに考えたこと、感じたことをお話をいただきたいと思います。

まず、どのようにテーマの設定に至ったのかという流れを説明しておきますと、それぞれの研究内容について報告をし、お互いの理解を深めた上で、関心のある事柄を話しながらキーワードを出し合い、ブレインストーミングのように関連するキーワードを挙げていき、その中で関心を共有することができる事柄を最大公約数的に選択しました。もちろん共同研究を行うに際しても、それぞれの個人研究が軸となることには変わりありませんので、それぞれの個人研究を活かせるところやお互いが乗り合えるようなところはどこかと模索していきました。当時のことを振り返るとただただ大変だったという思いが強いですが、皆さんはいかがだったでしょうか。

西村)忘れてしまったところも多いのですが、確かに研究内容がみんなばらばらだったので、落としどころを設定するまでが結構大変だったと思います。何かいとも思うテーマがあっても、まあ悪くはないけどって思う人がおそらくいて。みんながこれだと思えるテーマを設定するのは大変だったという印象があります。あと、テーマを設定するまでにも時間がかかりましたし、それを具体化して、どういう研究会をしていくとか、そういった具体的な話を詰めていくのにも、1年くらいは結局かかったかと思っています。

井黒) そのとおりですね。恐らく、最初の1年目で大きなテーマを決めて、そこから2年目以降は、より具体的な下位のテーマであるサブテーマを設定し、さらにより具体的なトピックを考えながら、どういう人選をして、研究会やシンポジウムを作っていくのかという段階に移っていきました。

大澤) まずメンバーがそろって、お互い何をやってきたのかを紹介し、理解し合わないと共同研究のテーマは決められません。なので最初はお互いの接点を探り合うところから始めるしかないのかなと思います。また、共同研究のテーマは3年計画ですが、初期の段階では多少もたつくこともあるでしょう。記憶の限りだと、研究会やシンポジウムでお話ししていただきたい人を、各自が思いつく限り、とりあえず挙げていくというところから始まったように思います。そういうところから始めるしかないでしょうし、それぞれの研究課題や関心について話し合うなかで、こういう人もいる、ああいう人もいるという自由な雰囲気からスタートできたことは、よかったのではないかと思います。

井黒) なかなか難しかった反面、そこがすごく面白いところでもあったので、テーマが設定された後にメンバーに入られた荻さんや陳さんに関しては、生みの苦しみとともにその面白さも少なくなってしまったのかなっていう気もしますね。

青柳) 初めて顔を合わせたメンバーが多い中で研究計画を立てていきますし、研究員が途中で替わっていくこともありましたので、3年目にどんな成果を示せるのかが未知数だった点は、この共同研究の難しさだったと思います。

井黒) 共同研究の成果の提示方法がなかなか決まらなかったのは事実ですね。第1期の3年間の成果は最終的に共著のような論文を書くというかたちで仕上がったのですが、私自身、その方法がよいのか、あるいはそれに替わるものが他にあるのか悩み続けていました。ですので、最初から皆さんに提示できるアイデアもなく、皆さんにとって成果の出し方がイメージしにくかったというのは、そのとおりだと思います。今回の座談会は3年間の成果のまとめと位置づけておりますので、今後の展開を考えると1つの成果公開のあり方になり得るかと思えます。もう1つは、当初、他の指定研究と同じようにトータルな3年間の成果を求められていたことも問題だったと思います。しかし、東京分室の共同研究は他の指定研究とは性格が大きく異なるため、それとは違いかたちでの発信、あるいは成果の報告ができないかと考え、今では1年ごとに成果を公開していくという選

択肢も出てきております。例えば、1年ごとに開催したシンポジウムや研究会の成果をとりまとめ、それを3年間積み上げていくという形も想定できます。

鍾) 私は当初応募時には、科研費のように1つの大きな研究プロジェクトがあって共同研究班があり、そのプロジェクトメンバーとして、それぞれ自分の専門から共同研究に貢献するというふうに想像していました。着任した後、それぞれ関心の部分を挙げて、互いの共通点を探り出して共同研究のテーマを設定していくということを知って、ちょっとびっくりしました。テーマ設定について議論した際、メンバー全員の専門分野が離れていて、宗教と社会という大きなテーマを設定したものの、サブテーマをどのように設定するかは結構苦労したと記憶しております。私自身はこれまで宗教関係の研究成果が少なく、宗教と社会というテーマで研究会やシンポジウムに報告者として呼べる人の名前を各自が挙げると聞いたとき、知り合いの中に宗教関係者は少ないので、どうしようかと焦りました。

月曜日は分室メンバー全員出勤の日で、かつ井黒先生は月に2回分室にいらっしゃいます。それに合わせて、分室ミーティングは月に2回行われますが、最初の頃はミーティングの内容も定まらず、どのように進行するかもわからなくて右往左往の状態でした。初年度の前期はこのような感じだったと思います。2019年の夏頃になり、研究会やシンポジウムの開催時期が大まかに決まったことで、そこから逆算してミーティングの内容を決めるという形になったと思います。例えば、研究会やシンポジウムの報告に関連する参考文献を事前に読んで理解を深めるために、それぞれが担当する論文を決めて、順番に各自が論文の内容を整理して発表し、議論するという形で勉強会を行いました。来年度から室長が変わり、新しい体制になりますので、同じやり方で進めるかどうかは分かりませんが、最初から1つのテーマがあって、そのテーマに向けてイベントを計画していくほうがやりやすいのではないかなとは思いました。

井黒) テーマが決まらない中、右往左往したのは、みなさんそうだったと思います。実際に動きだすことによって、ようやく自分たちがやろうとしていることが少しずつ明確になり、その方向性が見えてきたのだと思います。シンポジウムや研究会を実際に組織し、それに合わせて動いていく中で、ようやく自分たちのやろうとしていた、あるいはこれからやろうとすることがはっきりとしてきたっていうのは、その通りだと思いますね。ただし、今後もそれを続けていいのかというところ少し不安は残ります。これまでにシンポジウムを4回、研究会を6回開催

し、ノウハウも相当に蓄積されてきたと思います。もちろんイベントの企画と運営は、すごく大切な課題ではあるのですが、あくまで自分たちのやりたいこと、あるいはやろうとすることを実現するための1つの方法が、シンポジウムであり研究会であるということ、もう一度問い直してみることも必要でしょうね。

また、鍾さんがお話になられたように、研究会とシンポジウムに関連して、事前の勉強会がとても有意義だったと思います。いろんな分野の人たちが集まっているので、そのまま何も知らない状態で研究会やシンポジウムには臨みません。そこで、イベントの企画をした人が中心となって、報告をお願いしている方や関連する研究者の論文を事前に読んで、意見を交わし理解を深める。そうして報告者の話を聞く。研究会などでは当日の報告だけでなく、事前勉強会の内容や関連論文の内容を踏まえて質問をするという形で、事前の勉強会と研究会が有機的にリンクしていったと思います。シンポジウムは、さらにもう一段階規模を大きくし、テーマも少し広げて開催をする。こうして最終的には勉強会、研究会、シンポジウムがうまくリンクして機能していました。これらはすべて皆さんのアイデアであり、勉強会をするとか、あるいはスピーカーにこういう人を呼んでくるとかのアイデアをもらえたので、それが積み重なっていった形になったと思います。今後も宗教と社会という問題はこれからも変わらない根幹のテーマになるかもしれませんが、その下位の、今の共同研究で言えば「社会的価値観」に当たる問題意識やもう一段階下のサブテーマに関しては、それぞれのメンバーによって変わっていくことになると思います。各レベルのテーマをそれぞれが考えながら、それを踏まえてシンポジウム等を企画する。その順番を履き違えないように注意をしないといけないのかなと思っています。

これも当初からの問題でしたが、共同研究と個人研究のバランスや両者の関係をどのように位置づけるのかという点も相当に難しかったと思います。大澤さんのお話の中で、共同研究があることが東京分室に応募する1つの動機だったとお聞きして、改めてこれがあってよかったと思ったのですが、同時に共同研究が逆に皆さんの手足を縛ってしまうんじゃないかという不安もあり、その辺のバランスをどう取っていったらいいのか悩み続けてきた3年間でもありました。それぞれの専門性やご自身の問題意識によって意見は異なると思いますが、共同研究と個人研究の関係について感想やご意見を聞かせてください。

荻) 僕自身も先ほどの西村さんの話を聞いて思い出したのですが、応募する動機

としては、共同研究のテーマが「宗教と社会の関係をめぐる総合的研究」とあり、宗教社会学を専攻している僕でも応募できるのかなと思ったのが、最初のきっかけだったと思います。公募内容を最初に確認したときに、真総研という響きからして、いかにも真宗学を専門としている研究者だけが採用されるようなものだと思いながら公募要領を読み進めていくと、最初の印象とは異なることが分かり、この共同研究のテーマにも興味を持って応募させていただいたという経緯がありました。先ほども申し上げたとおり、共同で調査をする中で得られるものは1人で調査している人間としては非常に貴重だと思います。それ以外にも様々なシンポジウムや研究会をとおして自身の知見が広がる点も先に指摘した通りです。特に個人的にはエスニックマイノリティと宗教関係を扱っていますので、例えば以前のシンポジウムで取り上げた仏教と障害の問題とか、あるいは女性と仏教の問題とか、ほかのマイノリティと宗教の関係についても、色々そこで考えさせられる機会があり、僕としては非常に自分の研究にもフィードバックできる場所がありました。また、直接的にはないですが、例えば社会的に抑圧されているマイノリティにとって宗教はいかなる役割を果たしてきたのかという点について様々なケースを学ぶことができました。こうした点から見ても、共同研究が自分の個人研究にも十分に活かせたと思います。

話は変わりますが、今回の生駒調査が中止となり、コロナがいつ収束するかわからない状況の中で、共同調査のやり方についても再考する必要があるのかなという気がしております。現状ですと、大体1年に1回ぐらいで、有志が遠方に行って現地調査するといった形を採っています。こうした形式はもちろん重要だとは思いますが、他方で近距離で、宿泊も想定しないで、行けるようなところに行くというのもありなのかなと思っています。

井黒) 実際に誰かが、例えば荻さんが調査をしているところに私が一緒に行って調査の様子を見せてもらうとかということですね。

荻) 例えば私のフィールドでいえば、東京の荒川区だとか、足立区だとか、そういったところに行って共同で調査をするということです。近距離だと何がいいかという、何回でも気軽に行けるという点があると思います。一概にワンショット・サーベイが悪いという話ではないのですが、別の選択肢というか、バリエーションがあってもいいのかなとも思います。例えば、年1回の遠方への調査には都合が悪くてどうしても行けないという研究員も過去にはいらっしゃったかと思

うのですが、近距離で何回も行けるということであれば、このタイミングはちょっと無理だけど、2回目なら参加できるといったようなかたちで柔軟に対応できると思います。やっぱり2回、3回と続けていくと、それだけで発見というか、調査も深められるかと思えますし、研究として堅実なことも言えるかなと思えました。

井黒) 私も面白いと思ったのは、文献を読むということに関しては、恐らくは多くの人が自分のトレーニングやこれまでの経験でやってこられて、これからも大きな問題はないと思うのですが、現地調査をするとか、あるいは違う調査の方法を知るというのは、自分だけではなかなかできないですね。オブザーバー的なものでも構わないと思うのですが、誰かの調査を見せてもらう、あるいはそれについていく。そうやって他の分野の研究者の調査の方法を知るということはすごく大切で、特に分室のようなそう大きくはない研究グループでやっていくには本当にプラスになると感じました。

荻) 首都圏でやれば、東京分室でやる意味もあるのかもしれないね。

井黒) 確かにそのとおりですね。面白いと思います。これは実現可能だし、具体的な方法を考えられるんじゃないかなと思いますね。

陳) 共同研究と個人研究の相互の関係につきまして、共同研究に携わることによって、本来の自分のルートでは触れないものに触れ、それぞれの個人研究においてもそうした視点を用いてものごとを考えることで、新たな切り口が生まれると思います。例えば、最初に参加した研究会では、エホバの証人に関する内容が紹介されました。そのとき、自分もプロライフ運動に関する研究を始めたばかりでした。エホバの証人に関しては、これまでやや原理主義で現代社会の主流の価値観と相容れない団体だと認識していただけでしたが、報告を聞きながら団体への対応の方法や調査の際の研究者としての自分の姿勢について考えさせられました。また、西村さんが報告された研究会の際に紹介して頂いたバチカンの教皇に関する本など、共同研究を通して普段は気づかない情報を得ることができ、こうした情報を自分の関心と合わせることで、新たな発見につながるのではないかと思います。

青柳) 大谷大学の真宗学の問題点、あるいは大谷派の近代教学の問題点としまして、社会性の欠如ということが指摘されていまして、真宗と社会との関わりという点は、非常に関心のある問題でした。その場合に、私の基本的な考え方としま

しては、「宗教」という大概念の中に「社会」という小概念があるということになるのですが、分室に入ってみますと、そういう考え方をされる方は、むしろ少数なのだと感じました。その点がそもそも私には新鮮でした。ですから、荻さんが主催した新宗教の研究会ですとか、大澤さんが主催した「仏教と女性」のシンポジウムなど、近現代における宗教と社会の具体的な関係をお示しいただきまして、私としては本当に新しい視野が開けてきたという感じがありました。

井黒) 大澤さんは共同研究をもともと意識して応募されたということでしたが、実際にやられて、どのような感想をお持ちですか。また、個人研究との関係についてはどのように感じられましたか。

大澤) 事務的な面で言うと、個人研究と共同研究はお金が使えらる額が違うので、そこを皆さんもうまく使い分けていらっしやったのではないかなと思います。私のなかでは、それぞれ意識して分けていたところがあります。本来は3年間分室に在籍するつもりでしっかり共同研究もやりたいと思っていたのですが、コロナの影響で対面で集まっての研究会だったり、調査に行ったりすることができない期間が長く、当初思っていた通りの研究はできませんでした。それでも、分室の共同研究の成果として、何か見える形で残さなければという思いがあり、そのなかでの選択肢が研究会とシンポジウムの開催でした。コロナ禍であっても、社会発信のところだけは続けていけないと、という考えからでした。とりあえず研究会やシンポジウムを開催できたところで止まってしまいましたが、コロナの影響がなく、また3年間、皆さんと対面で活発に交流しながら共同研究に取り組める状態だったら、もっと違うことができていたのかなと思っています。また、先ほど少しお話ししたオムニバス形式の講座や授業、あるいは共同での論文執筆などでも良いのですが、そうしたことを一緒にすることによって、研究員同士がお互いの考えや研究課題をより深く知り、理解するといったことも可能となるでしょう。お互いの共通点をもっと見つけて、じゃあ、これは一緒にできそうだから、どこか調査してみよう、一緒に研究してみようとか、そうしたこともできたのではないかと思っています。

井黒) 新しい成果の発信に関して、ただ単にできあがった成果を発信するだけではなく、それが一つの共同研究の途中の過程であり、それが共同研究をさらに進めていく大きなきっかけになるというのは、まさにそのとおりですね。発信だけと考えると、何かすでにできあがったものをただ伝えて、それで終わりと

いう感じで、物事が終わってしまいそうなのですが、実際に大切なのはそこからさらに先ですものね。これは確かに考えないといけないところだと思います。シンポジウムなども開催して、それが終わるとついつい力が抜けてしまいがちですからね。

大澤) もう1つ、お答えするのを忘れていました。真宗との距離感ですが、私は真宗教団、あるいは、真宗教学というものを良く知っているわけではありません。しかし、私のように寺院出身でない人間でも、自由に何か物を言うことができたり、新しい情報や考え方を吸収したりと、開けた場所を提供してくださったことに感謝しております。そういう場所として、親鸞仏教センターがあり、同じ建物に分室がありますので、教団との接続も何かできたらいいなという考えもあります。在籍中は、親鸞仏教センターの方々と「女性と仏教」についてや、教誨師の問題など、真宗や大谷派の視点について一緒に議論することもでき、その点は良かったと思います。

鍾) 共同研究と個人研究のバランスについては、さきほど陳さんも言ったように、共同研究のために勉強した論文や本は、自分の個人研究に良い影響を与えるし、良い刺激にもなります。そういう意味で、共同研究に時間を割くことや、月2、3回の勉強会の準備作業で負担を感じることはありませんでした。ただ、共同研究への関わり、例えば勉強会や研究会、シンポジウムに向けてさまざまな準備作業があり、分室メンバー全員で分担してやらなければいけないという共通認識はあっても、やる気の違い、もしくはみんなで共同研究をするということに対する温度差がおそらくあったと思います。共同研究にどれくらい貢献するべきかについては、分室メンバーそれぞればらつきがあったかもしれません。2019年度の台湾調査でも、出張日程、参加メンバー、訪問先などを決定するだけでも結構大変だったと記憶しております。

東京分室が1つの研究班となり、共同研究のために予算がついているので、新型コロナウイルス感染症パンデミックがなければ、おそらく分室メンバーももっと海外への出張や学会発表ができたと思います。私個人としては台湾の現地調査はとても楽しく、たくさん勉強できたので、できれば分室メンバー全員で研究調査に行って、さまざまな経験を積んでいきたいと思っていました。専門分野がバラバラの4人ですので、みんなで行くことに意味があると私は思っております。今年度ももともと生駒山への調査が予定されていましたが、新型コロナウイルス

感染症の関係で中止となりました。海外への渡航は無理でも、国内で調査出張に行けたらと思いましたが本当に残念でした。メンバー共同で調査の準備をするので、連帯感も強まると感じます。

井黒) コロナ禍はどうしようもないところがありますが、現地調査ができなかったことで、どうしても活動が研究会とシンポジウムに偏らざるをえなかったのも事実ですね。成果としては確かに出しやすかったのですが、現地調査の実施などによってもう少し厚みや幅が得られたかもしれません。あるいは、直接すぐに反映されるものではないとしても、長い目で見て共同研究を実施していく上で、共同調査はすごく重要な意味を持っていると思います。それぞれのメンバーが今後の研究を進めていく上でも、重要な財産になったはずなんです。コロナ禍でどうしようもないところは確かにあるのですが、今後はできる限り共同調査をやっていく。今までよりもさらに大事に思って、研究会やシンポジウムと並ぶ共同研究のもう1つの柱として最初から研究活動に組み込んでいったほうが良いと思います。なお、現在のメンバーが東アジアを研究対象とするのに対して、フランスをフィールドとされている西村さんは共同研究のかかわり方について、どのように考え、取り組んで来られましたか。

西村) 皆さんがおっしゃったポジティブな面については全く同感で、それ自体に否定することは何もないですけど、やっぱりその一方で、この共同研究のテーマが自分自身の研究にどこまでかかわってくるのかと考えると、正直に言って無関係だったところもあるのかなと思います。応募の段階で共同研究というものがあるのかというものを私もよく分かっておらず、何か1つのテーマに関して、それぞれのフィールドから研究を行い、それらを持ち寄って何か集約するみたいな感じを想定していました。しかし、実際に始まったときは、誰か出せるネタを持っている人が出して、それについてみんなで勉強して、シンポジウムだったり研究会をしったりするという形だったので、そういうカードを持っている人を中心に研究会が進んでいくという感じがありました。それ自体はもちろんありがたいことですし、そこを否定するという事ではないのですが、そこに自分がどれだけコミットできるかということを考えさせられました。

また、あくまでこの分室においてはですが、自分の研究がある意味で特殊というか、ヨーロッパで、しかも文学の研究をしている自分が、共同研究のテーマを出す時に、他の皆さんと一緒に同じような仕方でもそのテーマを深めることができ

るかというやはりそれも難しかっただろうと思います。私が最初にイメージしていたのは、ある1つの共通したテーマを設定し、それぞれの分野からの研究を集約していくという感じでした。例えば、私でしたらこれまでの文学研究に加えて、フランスの宗教というサブテーマを設定し、これに関連した研究を進めていくという形を想定していました。しかし、実際の共同研究の進め方はそれとは少し違いましたので、知らない分野を勉強するとか、新たな知見が得られるという点は良いのですが、自分の研究と何らかのつながりを持ち得るテーマを出すことが難しかったことは事実です。

井黒) 私自身も責任者という立場にはありましたが、共同研究を自分の個人研究と相乗的に進めていけたかということ、あまりそうとも言えず、正直戸惑うことばかりでしたので、おっしゃってることはすごくよくわかります。もう1つは、ある程度、共同研究のテーマを絞り込んでから、それを明記した形で募集をかけるという方法も、それはそれで1つのやり方だと思います。ただし、それでは言い方は悪いかもしいないですけど、あまり面白くはない。東京という場所で研究をする意味は、もちろん大谷大学の研究機関ではありますが、大学とは少し違うスタンスで、もしくはある程度の距離感を保ちながら、独立した気持ちを持ち続けるという点が大きいと考えます。そう考えると、もう少し共同研究に幅を持たせることができるような、そういう人材を投入していきながら、あるいはそうしたテーマを選択しながら研究活動をしていかないと、分室の研究がどんどん小さくまとまっていってしまうような感覚がして、やはり不安に思うところではありました。新しい分野や違う分野の人が入ることは、なかなか大変だとは思いますが、特にテーマ設定はさらに難しくなると思います。しかしながら、そのジレンマは抱え続けながら、そこでもがきながらも幅を広げるというスタンスをとり続けるべきではないかと個人的には考えています。かじ取りはさらに難しくなると思いますが、継続的に考えていく必要のある問題だと思います。

井黒) 調査に関しては、もともと恐山に行く予定もあったり、生駒山に行く予定もあったり、色々予定していたことがあったのですが、残念なことにコロナでどこにも行けないという結果になってしまいました。ただし、これからは共同研究の充実のために、ぜひとも共同調査を実施して頂きたいと思っております。また、皆さんのお話の中で大谷大学の先生たちや学生さんたちとのコラボレーションを考えるべきだという内容もありました。また、いくつかの方法も提示してい

ただいたと思います。皆さん、大谷大学との距離や所属意識というのは、どのように感じましたか。

西村) 分室側からの距離は近いというか、大谷大学に対しての感謝の気持ちはすごくありますし、貢献したいという気持ちも強いのですが、大学側が分室をどこまで認識していらっしゃるのかという点については、よく分からないところがありました。ただ、事務の皆さまや井黒先生など、密にかかわっている方たちとは緊密な連携が取れていて、そうした意味では所属の意識はやっぱりあったと思います。大学として東京分室の存在をもっとアピールしたらいいと思いますし、分室がどうして存在しているのかなど、関心をもっと持ってもらえるとう一方的な片思いにならないのかなと思います。

大澤) 大谷大の先生方が東京分室の取り組みをどのくらい認識されているのかというのは、いつも気にかけていたのですが、もう少しやり取りができたならよかったのかなと考えます。学内には興味深い研究をされてる先生方がたくさんいらっしゃいますので、そういう先生方ともっとつながることができれば良かったかもしれません。分室で企画したシンポジウムの中には、学内の先生にあまり参加して頂けなかったものもあり、それは認知度の問題なのか、テーマの問題なのか、先生方がお忙しかったからなのかは分かりませんが、もう少し交流ができれば良かったです。先生方はお忙しいので難しいところはあるかとは思いますが、オンライン環境への移行というのは、分室にとってある意味良いチャンスだと思います。これを機に、東京と京都だけでなく、さまざまなつながりが生まれれば良いですね。

井黒) リモートは、実はある意味、東京分室にとってはすごく有効な技術になっていると感じています。もちろん、対面で会って話をすることの重要性は変わらないのですが、すぐに自分たちの活動をアピールし、発信できるという意味でリモートの技術は、これから先も有効に使える可能性が高いですね。成果の発信に関しては、皆さんに謝らないといけないところがあります。私自身の能力の限界や認識不足という問題もあるのですが、研究会やシンポジウムの告知も、最初は教員や学生に向けて向けてただ情報を提示するだけで、さあどうぞ来てくださいという形でしかお伝えできていませんでした。こうした方法が誤っていたと気づいた後は、それぞれのテーマに関心を持たれそうな先生方に個別に声をかけていくことで、シンポジウムも回を重ねるごとに学内からご参加頂ける先生も増えて

いき、少しずつ認知度も高まってきたかと思います。継続的にお願いを続けていくことは間違いなく必要ですし、どんどんと固定客（笑）を増やしていきながら、さらに、その人たちとの新たなセッションを考えていくということは、すごく大事な使命だと思います。片思いから始まっているかもしれませんが、少しずつ振り向いてきてくれているんじゃないかと感じています。

青柳) 私は大谷大学の出身でもありますので、私の研究者としての基礎は、大谷大学で形成されたということもできます。そのような私からしますと、大谷大学の中に向かって発信することの重要性もよくわかるのですが、むしろ東京分室は、大谷大学から距離を取れる場所という感じでした。大学から少し距離を置いて、自分自身の研究を客観的に見られる場であったということが、私にとってはかなり大きな意味を持っておりました。

井黒) 距離感の取り方はなかなか難しいかもしれませんが、バランスは考えなければなりませんね。そうでなければ、ただただ附属的に存在している組織にしかすぎなくなってしまうと、自分たちのアイデンティティを失う可能性が十分にあると思います。

荻) 陳さんもそうですけど、やはりコロナ禍に入ってから採用ということで、僕が大谷大学を訪問したのは今回が2回目で、1回目が2017年あたりでしたので、率直に申し上げて所属感っていうのは、ややふわふわしている状況でした。応募の段階では、大谷大学の先生方との交流も盛んに行われるのかと思っておりました。例えば、私の存じ上げる範囲でいえば、地域社会学の徳田剛先生がいらっしゃるんですが、徳田先生との交流もあるかなとったりしておりました。そういった意味で、Zoomを活用してもう少し相互の交流を進めた方が良いと思います。分室側からも積極的に発信して、同時に京都の方で行われている研究会やシンポジウムにも参加していく必要があると感じております。

井黒) 徳田先生にはこちらからお声がけしたらよかったですね。

陳) さっき荻さんがおっしゃった所属意識の少しふわっとしたところと、西村さんがおっしゃった片思い、両方とも共感できますね。前回のシンポジウムでは藤枝真先生にコメンテーターとしてご参加いただいて、大谷大学の先生とのつながりという意味で良い機会になったと思います。さらに先生たちとの交流を深めたいです。

井黒) 皆さんのお考えを聞いてると、分室としては、色々な形でつながりを持ち

つつ、独自の研究をやっていく。その方法として、陳さんや青柳さんがおっしゃられたような大谷大学教員との共同でのシンポジウムを企画するというのも1つですね。すでにこれまでも福島栄寿先生や藤枝真先生にシンポジウムでのご報告やコメントをお願いしてきました。こうした形を継続するとともに、新しい何かを模索するとすれば、どういった可能性が考えられるでしょうか。先ほどの大澤さんのお話の中に、授業の一環として私たちの研究をリレー講義で学生に伝えるといったアイデアがありましたが、その点についてももう少し補足することはありますか。

大澤) あくまで理想としてですが、やはり何か1つのことに一緒に取り組むなかでお互いを知ることができると思います。学内の先生との研究会や調査を分室の研究者がお手伝いしたり、あるいは、分室として例えば1コマ授業を持たせていただき、それぞれリレー形式でやっていくとか、そういう取り組みがもしできるのであれば、研究者としての今後へもつながっていくのではないかと思います。井黒) 先ほどおっしゃっていたように若手研究者の育成というのは、すごく大切な分室の目的の1つですので、それに関して教歴という点でバックアップができるというのは大学としても意義があることだと思います。

大澤) 教歴ともう1つは所属が大事だと思います。分室を抜けてしまうと、個人的な交流は別として、分室の研究者や大谷大学とのつながりが全くない状態になります。そこで、もし可能であれば、客員研究員というかたちで所属させていただいたり、紀要論文に投稿する権利があったり、図書館の利用ができたりと、そういったかたちでつながっていけると、OG・OBとの連携も保たれるのかなと思います。というのも、私たちは、前任の研究者たちとのつながりがなく、まず何をしたら良いか分からず、過去の紀要をめぐってみたいり、つてを頼って前任者の連絡先を教えてもらったりするという状態でした。ですので、何か今後もありとりでするような環境があれば、分室の取り組みの継承もできるのではないのでしょうか。

井黒) 大きな問題の1つが、前任者からうまく引継ができなかったことにあるのは間違いありません。OB・OGたちとの連絡についても、最近ようやく連絡用のメーリングリストができて、シンポジウム等の告知のために使わせていただけてますが、実際に有機的に元研究者たちとの提携ができていくかということ、まだまだそこまではいってないですね。すでに離職された元研究者の皆さんが新しい

職場での研究活動に関して、相互に情報の交換ができるようなプラットフォームが構築できれば最高なのですが。一方的に分室がイベントを開催しますという情報を流すだけでは、恐らくはほとんど意味がないですね。どういうふう提携を深めていくのか、どのように有効に人脈を生かしていくのかという問題は、これから真剣に考えないといけないところだと思います。また、今まではそれぞれの方が何らかの立場を見つけれられて、3年間の任期を終えられたり、あるいは3年以内に別の職場に移られることが多いですけれども、そうではない場合に分室としてどういうことができるのか、あるいはできないのかという問題も議論しないといけないと思います。また、大谷大学との連携以外にも、他の研究機関や研究者との色々な形での連携を模索していかないといけないと思います。今はコロナ禍で色々な制限がかかっている状態ですが、リモートを有効に活用すれば、いろんな活動の場が継続できると思います。皆さん、どのような研究機関との協働や提携が考えられるでしょうか。

青柳) 私の立場として言うておかなければならない点だと思うのですが、東京分室が親鸞仏教センターの中にあるということは、かなり大きなメリットだと思います。親鸞仏教センター自体も、親鸞思想と現代社会をテーマにしている研究所ですので、東京分室が研究交流を持つ意味は少なくないと思います。同じ建物の中に入っている2つの研究機関が、お互い何の連携もしないというのは、やはりもったいないことだと思います。実際、コロナが始まる前までは、西村さんに「親鸞とドストエフスキエ研究会」にご参加いただいたり、鍾さんに親鸞仏教センターの主催するシンポジウムに来ていただいたりということがありました。このような研究交流は、今後も是非続けていただけたらと思います。それから、東京分室の近所には、東京大学があります。私はコロナ禍が始まる前には、東大の大学院のゼミに参加させていただいておりました。このように、文京区の湯島という東京分室の立地は、かなりメリットのあるものだと思います。その点を活用できる方法はいろいろあると思いますので、是非模索していただければと思います。

井黒) 分室の立地はすごく恵まれていますし、可能性は相当大きいと思います。親鸞仏教センターとの関係に関しては、親鸞仏教センターの研究員の方にそれぞれのご研究についてお話を聞かせて頂くという機会もありました。今後も同様の取り組みを続けながら、交流を進めていく必要があることは間違いないですね。

大澤) 東洋大はいかがですか。

荻) 立地ではそうですね。確かに東洋大も仏教研究は盛んです。僕は残念ながらあまり携わってはないのですが。例えば、井上円了哲学センターや、あとは宗教研究で言えば東洋学研究所だとか、現代社会総合研究所も宗教研究者が集まるところです。

青柳) 親鸞仏教センター嘱託研究員の長谷川琢哉さんが、井上円了研究センターの研究助手をされています。

井黒) 提携の方法として、個人的なつながりを活かしていくのはすごく大事なのですが、それに加えて先ほど陳さんがおっしゃった様に、インターネットのコンテンツを充実させて、外部から見えるかたちでの私たちの活動をさらに広く公開していくことが必要ですね。もう1つは、海外もやはり視野に入れたいと思っています。海外に関しても、基本的には個人ベースでのつながりを見つけていく必要があると思いますし、少しずつそのつながりの糸口を増やしていけたらと思っています。

イベントの告知に関しては、大学の企画に関わる職員とも話したことがありますが、サイボウズやホームページ以外にも色々な方法を考えていかないといけないですし、技術的なことも含めてまだまだ改善の余地はあると思います。障害と宗教のシンポジウムの時に、直前になって情報保障のために手話通訳や字幕が必要だということになり、急遽、事務局に対応していただいたことがありました。この件については、私自身はそうしたリクエストや必要性があり得ることを事前に全く想定できておらず、大変反省した出来事でもありました。これからもオンラインでのやり取りが続くかどうかは分かりませんが、技術的な事も含め、色々な情報、特に様々な角度からの情報を取り入れていかないとまずいと改めて思い知らされました。次に、研究会に関して、皆さんの意見を聞いておきたいと思います。公開、非公開の問題も含め、これから研究会をどのように位置づけるのかというのも大事な問題ですね。

西村) やはり、どれだけ共同研究に時間をかけるかというところだと思います。ある程度閉じられた研究会であれば、そこまで形式的な大きな準備はなく臨めると思いますが、開いていくという方向だと、司会とか様々な役割分担が必要になってきて。そうすると、研究会で発表する側も、資料や時間配分などしっかり準備することが必要になってくると思いますし、その負担感をどうするのかという

ところで、研究会の方向性は決まるかと思います。どちらがいいということではないのですが、研究会を開きすぎると、シンポジウムと研究会の差別化の問題も出てくると思います。

鍾) 新型コロナウイルス感染症の関係で、寿台順誠さんを招いた研究会が初めて Zoom による研究会だったと記憶しています。その後、Zoom での研究会が増えていって、オンライン開催がある程度一般化したので、京都にいらっしゃる先生たちも東京分室の研究会に参加して頂ける可能性が出てきました。そのため、研究会を公開にするか、クローズドにするかという議論が出てきたと思います。コロナ以前の研究会は、分室か分室の上の階の会議室で開催されたので、研究会自体はクローズドではなかったとしても、自然に東京分室のメンバーしか参加しない状況になっていました。分室のメンバーは研究会に向けて、勉強会を開催し、メンバー同士で議論したうえで研究会に臨むので、研究会ではどのような発表があるのか、どういう質問をするのかをある程度まとめておくことができました。

また、先ほど大澤さんの教歴の話聞いて思いついたのですが、私の出身大学である立命館大学では、学部生向けのランチセミナーがあります。若手研究者(主にポストドクターの人たち)が自分の研究内容について15分間で発表し、学部生にこのような研究がありますよ、これから研究者を目指すのであれば、研究者という職業はどういうものかなど、それぞれの研究者像を示す講座です。学部生が参加しやすい昼休みの時間帯に開催し、参加者におにぎりとお茶を配って、おにぎりを食べながら講座に参加する形になっています。これは「ライスボールセミナー」と言って、若手研究者のデビューの場とも言えます。このセミナーも研究実績になりますので、良いアイデアではないかと思います。私自身も違うキャンパスで2回ほど発表しました。学部生との交流はとても新鮮で、私自身にとっても良い経験となりました。これと類似した講座は大谷大学でもできるのではと思います。東京分室のメンバーは大谷大学出身の人もいれば、他大学の出身者も多いので、学生ともっと交流できれば、お互いにとって良い経験になると思います。特に今は Zoom による開催が多いので、学生は京都にいても東京の研究会に参加できます。若手研究者の育成には良い方法ではないかと思いました。

井黒) 色々な可能性を探ってみたいですね。さて、実際に分室で研究活動を行っていく上で、物理的な問題や課題などはありますか。

陳) 図書館のデータベースなどを利用したいときに、遠隔地なので VPN の手続

きをする必要があります。何度か試したのですが、うまくいかず、挫折してしまいました。

井黒) VPN 接続の問題ですね。これは、以前からの問題でしたので、できるだけ速やかに対応したいと思います。

荻) 4人体制だから、そこまで問題にはなっていないのですが、分室の備品を置いてあるスペースが、本来であれば5人目の机の上に全部置かれている状態で、仮に5人体制になった場合は、その備品はどこに置くのかというのが疑問です。備品が置かれているせいなんですけど、少し手狭になってきてるなと感じます。備品を置くために新たに机を購入するなどして、今のうちに分室の快適な研究スペースを確保しておく必要があるのかもしれない。

あとは、事務の方が分室に1人いらっしゃったら、ありがたいですね。もちろん、現状で不満があるとか、そんなことはないのですが、むしろ、すごく丁寧に、筑田さんにも岩崎さんにも対応して頂いているので、ありがたい限りなんです。ただ、例えば国立国会図書館で遠隔複写を依頼して、毎回、例えば10件とか20件送られてきて、それを写真を検収しなくちゃならない。京都にいれば、その場で検収していただいてすぐ終わると思うんですけど、どうしても東京にいますと、全部を写真に撮ってデータで送る作業が必要になります。写真データといろいろ合わせてですので、事務の方にも相当迷惑をかけていると思います。こういう手間が積み重なってくると、結構しんどいなと思うことがあります。この件については、仕方がないと思っはいるのですが。

井黒) ご意見を聞かせてもらうのが大事ですので。ありがとうございます。物品や備品の話だけで済ませる必要はありませんので、分室での活動全般についてご意見があればぜひお聞かせください。

鍾) 来年度、東京分室の室長が変わり、室長の勤務体制が変わることで、井黒先生の時のやり方はあまり参考にならないかもしれませんが、基本的にはPD研究員の4人が研究室の運営をしていくと思います。そのため、研究環境の維持も分室メンバーで話し合って決めなければいけません。私の性格がおせっかいということもあって、ごみ出しの曜日、月に何回ごみ出しをするとか、掃除機をかける頻度とか、このような細かいルールを1年目に私と西村さんとで決めました。あと、年末の大掃除も分室メンバーが話し合って行いました。やはり研究環境の維持は大事なので、掃除について最初からみんなで話し合っただほうが良いと思いま

した。

井黒) 私は全然知らないままに、きれいな環境をただ享受してただけでした。ごめんなさい。掃除の手伝いもできずに申し訳ありません。是非きれいな環境を保ってってください。1つ言うのを忘れていたのですが、共同研究の活動の発信の仕方として、学会でパネルを組んで報告をするということも考えていくといいのではないかと思います。これからの課題として、頭の片すみに置いていただければ、有り難いです。

井黒) それでは時間もまいりましたので、これにて座談会を終了したいと思います。次につなげていけるような色々なアイデアを出していただきましたので、新しい人にも頑張ってもらって、残る人たちにもさらに頑張ってもらいたいと思います。皆さま、本日は本当にありがとうございました。(終了)

以上が座談会の内容である。3年間の研究成果のとりまとめとしての座談会という形式自体も初めての試みであったが、全体を通して率直な意見が交わされ、各研究員の個人研究の成果と共同研究への貢献が端的にまとめられたと考える。とりわけ共同研究の面白さや難しさに関する各人の発言からは、今後の東京分室の目指すべき方向性が読み取れるとともに、さらに改善すべき問題の所在が明らかにされた。特に人材の選抜に始まり、研究テーマやトピックの選定、勉強会や共同調査の実施、研究会やシンポジウムによる成果の発信とさらなる研究活動へのフィードバックに至る一連の共同研究のプロセスに関する意見は、今後の東京分室の活動のみならず、本学における様々な研究活動に大きな意味を持つものであると確信する。

* 本稿は2019～2022年度東京分室指定研究の研究成果である。